

東洋医学・健康 奉仕のページ 製作協力＝（財）京都仏眼協会・仏眼鍼灸理療学校

ロータリーの「世界の窓週間」

「地域の発展を願い、安全で快適な生活環境を作り、すべての人々が幸福に暮らせるようにと、世界的な規模で奉仕すること」を目的とするロータリークラブは今年、創立九十周年を迎え、これを記念して二月十九日から二十五日までを「世界の窓週間」と銘打ち、地域社会の意識向上プロジェクトが世界各地のロータリーで実施された。

京都市西京区をエリアとする京都西南ロータリークラブ（会長＝大久保昇日本漢字能力検定協会理事長、会員百九人）では、この呼びかけに呼応して二十五日、京都市西文化会館ウエスティを会場に「西京区・住みよい地域社会を考える」をテーマとする“サウスウエスト・フェスティバル”を盛大に開催した。

近年、目ざましい発展を遂げている京都市西京区の行政と民間の公共活動団体が参加、さらに折からの兵庫県南部地震のボランティアや救命救済活動の報告を聞き、今後の対策を考えた。大久保会長が理事長を務め、地元にも本部を持つ（財）日本漢字能力検定協会が協賛した。

災害時の対応など検討

住みよい地域社会考えるシンポ

京都西南 R C

兵庫県下での奉仕体験発表

大久保会長からロータリー第二六五〇ガバナーの二橋貞雄氏に阪神・淡路大震災見舞金として五百万円の義援金が送られた。

パネルディスカッションは、「西京区・住みよい地域社会を考える」をテーマに、コーディネーターを大久保会長が務め、大震災などを念頭においた災害対策など、住みよい地域社会のあり方を求め、各団体の会長が、それぞれの立場から地域社会活動の抱負を述べた。

まず大久保氏は「地域社会にお世話になる者として、社会のニーズに耳を傾け、ニーズに沿って最良の活動を展開するには、地域の団体の協力がなければならない」とこの企画を立てた。地元行政、団体の方々に厚くお礼を申し上げたい。地域のことを反映させるには共同作業をやるのが一番大切と考えた。各団体の活動を知っていたわけではなく、この企画を立てて初めて知った。よくやっていらっしゃるなあと思った。大震災が起こってボランティア活動が有効に機能したということで、今回は梅垣さんと遠藤さんに特別に出てもらった」と司会の言葉を述べた。

パネリストは京都市西京区長の荒田又之助氏、同西京区自治連合会副会長の城戸平左衛門氏、西京区社会福祉協議会会長の豊田英嗣氏、西京区地域女性連合会会長の安田桂子氏、西京区体育振興会連合会会長の中村安良氏、桂少年補導委員会会長の山口増夫氏の六人。

特別参加として今回の大震災で救助活動に当たった西京消防署警防課担当課長の梅垣眞氏、ボランティア活動に献身的な働きをしている京都女子大学の遠藤圭美さんが出席した。

まず、大震災の救助活動に当たった梅垣氏は次のように述べた。

「ヘリコプターや事務面でも応援にあたり、延べ百五十三台の救急車で九百八十人が出動して長田区の火災に対

処した。水がないので水道車で何度も往復。五千四百人の犠牲者のうち、五百人くらいは焼死者とみられる。生きながら煙に巻かれて亡くなられた方たちの無念さも感じた。

行った現場が軽度で、『もっと大変なところへ行けばよいのに』と言われ、その言葉が印象に残っている。今回のような災害で全てに対応するのは不可能と思う。大災害では到着する前に応急処置の必要がある。救命の応急処置を身につけてもらう必要がある。消防署の限界も感じ、市民自身の防災活動の必要性を感じた。西京区に自主防災会があるが、会の強化で住みよい、災害に強い西京区になってもらいたい」

遠藤さんは「京都Y M C Aのボランティア・リーダーとして、何かしなければいけないと思っていた。初めは技能のある医師や看護婦を募集していた。精神的なケアが必要ということで、子供たちと触れあう活動をした」と語り、さらに次のように続けた。

「西宮Y M C Aの活動に参加して一つは福祉ローラー班、寝たきり老人や障害者の物資の配給を手伝い、お話を聞いてあげる。二つは遊ぼう隊、西宮中央体育館や本山第二、第三小学校など避難先の子供を相手に遊ぶ。笑顔を見せる子、笑顔のない子、暴力的な子と、いろいろだった。

同情するのではなく、話を聞いて受け入れてあげるとのこと。リーダーの家はどうだったのかと聞かれ、私は京都に住んでるので大丈夫だったと言った。死体ごっこをと言われ、どうしようと思ったこともある。子どもは明るくなって嬉しいと思うが、水や電気も復旧し、仮設住宅もできて、子どもたちの声を出す場や遊ぶ場も変化している。

今後の援助は課題の一つ。四月には学校が始まり、活動ができなくなる。地元の方に引き継げるような活動を心がけている。これからの長い住民の戦いにできるだけ応援させていただきたい。復興は住民の力による。我々はあくまで手助けである。それで、今回申し上げたいことは、特定の方だけでなく、皆にとって住みよい地域社会を日頃から考えていただきたい」

京都・西京区の「ウエスティ」で開かれた地域社会を考えるフェスティバル【写真は省略】

震災を貴重な教訓に

西京区 瓦の損傷四百余戸

「地域に密着した活動」を誓う

その後、荒田区長をはじめ、各パネラーから地域活動の報告が行なわれた。

荒田区長は「今回の地震では、西京区でも四百数十軒もの家で瓦がずり落ちたりしている。そうした被災者の税の免除などの取り組みを検討している。西京区は昭和五十一年に独立し、九万人の人口が十五万人に増えている。若い区で洛西ニュータウンや桂駅を中心に開発が進み、新しい方、古い方が一緒に生活している区。各団体の結びつきが活発になっているだけに、地域のために頑張りたい。都市基盤が弱い、水害というと西京区だと言われる。道路、橋の整備が急がれている。頑張っていきたい」。

社会福祉協議会の豊田会長は「いま地域福祉が注目されている。ノーマライゼーションー社会福祉全体のあるべき方向、理念が求められている。障害のある人、ない人、高齢者、児童の全てが地域社会で生活を営む権利を満たされる社会づくり。地域福祉はどちらかというと、施設が中心であったが、福祉の仕組みを作りたい」。

城戸自治連合会副会長は「昭和五十一年に右京区から分離して独立、八学区の自治連合会が発足して二十年になる。新しい住民と昔からの住民と西京区を良い町にしようと区民の連帯と自治意識の向上に取り組み、一昨年、ウエスティが完成した。市民ぐるみの活動ができるようになって喜んでいる」。

中村体育振興会連合会会長は「区民十五万人のスポーツの振興によって、安らぎのある市民の健康づくりに日夜頑張りたい」。

安田地域女性連合会会長は「京都市の地域女性会は昭和二十三年から四十五年の歴史を刻み、社会教育、生涯学

習団体として、学習・親睦・奉仕をモットーに、女性の地位向上と地域づくりを目指してきた。西京区では十二学区の約一千七百人の会員が、地域に密着した活動を『知り、考え、行動する』を会の目標にして頑張っている」。

桂少年補導委員会の山口会長は「警察署単位で青少年の育成に取り組んでいる。子どもたちと信頼関係を育てることが大事。国際交流をロータリーを通じて毎年行なっている」。

なおフェスティバルのパネル展示では、京都西南ロータリークラブの「今日までの歩み」の紹介、各種地域団体の活動が紹介された。

模擬店では、巻きずし・うどん・ぜんざい・コーヒー・ジュースを販売。バザーは、有志が持ち寄った品物を、格安で販売した。

週刊で発行する同会の会報では、大久保会長自らがインタビュアーとなって地域の諸団体の指導者を訪ね、地域社会が抱える問題点や発展策を引き出し、地域社会のあり方を啓蒙している。今週は荒巻禎一京都府知事を訪ねている。